

## 「異界」の意味領域 ― 〈術語〉のゆれをめぐる―

池原陽斉\*

本稿では「異界」ということばを調査対象とした。近年、このことばは耳目にふれることがおおく、語彙として社会に定着していると考えていいだろう。その一方で、ほとんどの小型辞典に登録されておらず、大型・中型の辞典でも、用例がなく、説明も一定でない。「現代の流行語」として、伸縮自在な語義があたえられているというのが現況である。異界は「現代の流行語」だが、類似、ないしはほぼ同等の概念をさすことばはそれ以前から存在し、龍宮、黄泉などをさすことばとして折口信夫が使用した「他界」「異郷」、あるいは近世において遊廓、芝居町等をさす「悪所」などがそれにあたる。異界はこれらのことばをいずれかをひきつく、またはいくつかを統合した概念語として使用され、それだけに定義がさだまらない。そのため、語誌的な調査をおこない、使用例にもとづいてその意味領域の一端をあきらかにした。

キーワード…異界、術語、語誌、意味領域、他界

### 序

異界ということばは現在、耳目にふれる機会がおおい。

たとえば書店やゲームショップなどを散策していれば目にとまることもすくなくないし、GoogleやYahooなどの検索システムを利用すれば、枚挙いとまなく発見することができる。

しかし、相当に流通していることばである一方、というよりも

流通していることばだからこそ、その定義については曖昧な点が多くなくない。またその曖昧さが利便さをうみ、氾濫の原因となっている面もあるようだ。

もちろんひとつのことばが複数の語義を派生させること自体は、なんら特殊な現象でなく、問題とすることでもない。

しかし本稿が問題とする、術語としての認定にことがおよぶ場合には、一般語彙におけるそのような現象とは、混同することは

できないだろう。

いうまでもなく異界ということばは概念語である。そして概念語は、学術書・論文等においては、あることがらを説明するためや、分類のためにもちいられるのが通常で、すくなくとも異界については、そのようにかんがえてよいとおもう。

そして術語は、そのことばがしめす範囲に対して適切に使用されるべき<sup>一</sup>で、また論旨の前提となる術語が、あまり意味領域をひろげすぎることとはのぞましくない。そのことばによって想起されるべき認識の共有をはばむことになり、齟齬や混乱の原因となることが予測されるからである<sup>二</sup>。

異界の意味領域が多義にわたり、不透明だということは、稿者のみの問題意識ではない。十川信介は以下のように問題点をあらわにする。

「異界」という言葉は、大変便利である反面、その領域がいまいで、いざ辞書的に定義しようとすると何かがこぼれ落ちてしまふ感じが残る。その原因は、この語がまだ発展途上にあり、増殖のスピードに私（または私たち）の語感がついていけないからだろう。<sup>三</sup>

ただし十川氏は、「辞書的に定義しようとすると何かがこぼれ落ち」る理由を、「語感がついていけない」と、享受者の意識に還元するが、かならずしもそうはいえないだろう。

むしろ、なかば無制限に意味範囲が拡大していることが、享受者の把握をこぼんでいるという面があるのではないだろうか。

もうすこしふみこんでいえば、「大変便利」な異界という術語

によって、本来はことばをつくすべき内容について、微細な説明が捨象されてしまっている面もあるようにおもう。

たとえば上野誠は、民俗学における〈神〉という用語の汎用について、つぎのようにのべる。

……〈神〉とはフィールドで観察することができた〈現象〉を説明する説明装置であると換言することができる。……  
 〈神〉という説明装置にすべてゲタをあずけることによって、われわれはしばしばフィールドにおいて思考停止していないかといことを疑う必要があるだろう。<sup>四</sup>

この指摘は、〈神〉におおくをたくすことへの警鐘であるが、異界にもそういう側面があるのではないだろうか。

本稿の目的は以上のような問題意識にもとづき、この異界ということばが、従来どのように利用されてきたのかについて、使用例の調査から還元し、明確にすることにある。

また、このことばは比較的あたらしい術語で、来歴がとほしい。そのため異界以前の術語についてもさぐりたい。つまりは、このことばの語誌と、その前史とをさぐることに目的となる。

このような調査の場合には用例の網羅が基本であるので、小説やマンガ、あるいはゲームといった、実作にもふれられればそれにこしたことはない。むしろ社会における語彙の実態解明を志向するのであれば、これらを資料とする方が有益である。

しかし本稿では、あくまでも術語としての定義のありかたを論点としたため、それらの例については基本的に割愛した。

そういった、限定された範囲での調査結果が、正確な語誌をみ

ちびくかどうかは、問題もすくなくないだろう。しかし、ひとつの橋頭堡であると任じて論をすすめたい。

—

さきに異界ということばが、耳目にふれることがすくなくないことをのべた。この説明に対して違和感をおぼえるひとは、それほどおおくはないだろう。

一方でこのことばの辞書における定着は、それほど顕著でない。いま流通しているハンデいな国語辞典の最新版を利用して、異界を検索してみると、『旺文社国語辞典 第十版』(二〇〇五)、『新明解 第六版』(二〇〇五)、『三省堂現代新国語辞典 第三版』(二〇〇七)、『学研現代国語辞典 第四版』(二〇〇八)、『岩波国語辞典 第七版』(二〇〇九)、『明鏡 第二版』(二〇一〇)といったあたりには立項されていない。小論文執筆等のために概念語をくわしく説明する『ベネッセ表現・読解国語辞典』(二〇〇三)にもなく、常用のことばとして認定されていないことをしめしている。

そのなかで、『三省堂国語辞典 第六版』(二〇〇八)が「日常の世界とへだてられた幻想的な世界」として、この語をとっているのは例外的である。

これは『三省堂国語辞典』の主幹であった見坊豪紀が、なまの現代語をひろく蒐集し、活用する編集方針をたてたことと関係している<sup>五</sup>と想像でき、同辞書の面目躍如たる例だが、この辞書でも第五版(二〇〇一)時点ではとっておらず、新掲載の語である。

中型辞典に目をむけても、『大辞泉 増補新装版』(一九九八)、『日本語新辞典』(二〇〇五)にはなく、『広辞苑』でも、一九九八年刊行の第五版にはない。最新の第六版(二〇〇八)でようやく立項されるにいたっているが、後述する使用例の年代からかんがえれば、これはかなりおそい。

また、日本における漢字、とくに近代以降の日本漢語の用例蒐集に力をいれた『新潮日本語漢字辞典』(二〇〇七)にもない。

刊行されている国語辞書のなかで、もっとも大部なものである『日本国語大辞典 第二版』の第二巻(二〇〇〇)にはさすがに立項されている<sup>六</sup>が、この大部な辞書さえも用例をあげておらず、かえって定着のおそさが実感される。

このような傾向のなかで、『大辞林 第二版』(一九九五)が異界をとっているのは、かなりはやい<sup>七</sup>。同書では以下のように説明する。

人類学や民俗学での用語。疎遠で不気味な世界のこと。亡霊や鬼が生きる世界。

同社の『三省堂国語辞典』に類する説明で、「疎遠で不気味な世界」「亡霊や鬼が生きる世界」とあるので、現実とはことなる空間を「異界」と認定しているとみてよいだろう。ただし、学術用語であることわっている点がことなる。

この変化を、十四年のあいだに使用領域が拡張したこと、つまりは語彙の一般化、通俗化にもとめられればおもしろいが、『大辞林』は第三版(二〇〇六)でも説明をかえていないので、単純に辞書のスペース、あるいは筆者のことなりによるものだろう。

ともかく、この『大辞林』の定義が、辞書の説明としても普遍的ではないことは、『日本国語大辞典 第二版』の「日常生活の場所と時間の外側にある世界。また、ある社会の外にある世界」との記述にあらわれている。

こちらでは説明に「時間」がふくまれ、かならずしも空間のみに特化してはいない。また、「社会の外」ともあり、やや語義の範囲がひろい。ただし、「亡霊」や「鬼」といった、イメージを喚起する具体例がない分、やや抽象的であり、語義はそれほど明快でない。

『大辞林 第二版』の説明にちかいは、『日本民俗大辞典』の記述であろう。

……民俗社会で、靈魂が行く世界、つまり他界(来世)だけでなく、自分たちの社会の外側に広がる世界である。他界が時・空間両方の認識であるのに対し、異界はより空間的なイメージで把握される。……また現代社会では、特定の社会集団から見た異質な社会集団の生活・行動空間を異界と呼ぶ場合もある。この言葉は民俗語彙ではなく、分析概念であり現代の流行語ともなっている。<sup>8</sup>

とくに異界が他界とくらべたとき、時間よりも空間にかたむくという、波線部の説明がそれにあたる。

しかし、一方では「民俗語彙ではな」く、「分析概念」「現代の流行語」とも明言しており、この点は『大辞林 第二版』にみえる「民俗学の用語」という説明と抵触するともとれる。

もっとも、この点については「民俗語彙」と「民俗学の用語」が、

かならずしも同一ではない、というふうにかんがえることで整合性をえられるかもしれない。しかし、古手に属する『総合日本民俗語彙』(第一巻)<sup>9</sup>はもちろん、比較的近時の刊行である『日本民俗宗教事典』<sup>10</sup>にも異界の立項はなく、「民俗学の用語」といえるかどうか、かなり疑問がある。

また『日本を知る事典』<sup>11</sup>によって現在ならば異界と説明されても故障のなさそうな個所をいくつかとりあげてみれば、妖怪のすまう場所については、「それぞれ山間・路傍・屋内・水中など、どこか一定の場所」と具体的な場所によって説明され、異界という抽象的なくくりかたはしていない。

また、「高天の原」「夜見(黄泉)の国」についても、それぞれ、「長時間的な世界」「反価値的な世界」と説明され、異界という単語に集約させるようなことがない。また、「神隠し」によってつれさられる場所のことは「霊界」とだけいついて、やはり異界とはない。

以上のように、いくらかの辞書・辞典の記載をならべてみただけでも、異界ということばの定義が一樣ではなく、問題のすくないことが了解されるであろう。次章以降ではこの定義をふまえて、具体的な書籍・論文をおっていきたい。

## 二

異界は『日本国語大辞典 第二版』に用例がないように、比較的あたらしいことばのようである。術語としても、ほぼこの三十

年ほどで多用されるようになったとみてよいとおもう。

ただし、それ以前に全然用例がないわけでもない。

たとえば柳田國男『日本の傳説』<sup>十二</sup>は、一九二九年の例である。

当該書には、日本各地の伝説に関する梗概があるが、そのなかの「羽衣」に、つぎのような記述がある。

富士の山麓を中心として夙く発達してゐた鶯姫の物語、即ち竹を伐り箕を作つて世を渡る貧しい老人二人が、一朝に神女を得て家富み栄えたといふことなども、後にその美人が飛んで空に昇つたといふことを結末にしてゐるのを見ると、同じく又異界交通の神話の名残で……云々

天人女房についての説明であるが、ここで柳田は神女が空にかえっていく（別の個所では「天に飛び還つた」ともいつているから、空と天は同義である）ことを、「異界交通」と称している。

この例を根拠として異界という術語の成立をかんがえるならば、昭和のごく初期から利用されたと定義できるが、これはおそらく無理である。

というのも、『定本柳田國男全集』の索引<sup>十三</sup>によるかぎり、異界ということばはこの一ヶ所しか使用例がなく、それも「異界交通の神話」というかたちで立項されている。柳田が安定的な術語としてもちいた形跡はないし、全集の編者たちも、柳田の術語とはかんがえていなかったとみてよいだろう。この孤例を根拠に、通時的な術語と認定はできない。

常用のことばとしてもちいっているかは重要な点で、意識的に使用しているかみとめられることばでなければ術語とは呼べない。

単発的な使用例は、中型・大型辞書の用例としては重要だが、それは本稿の目的とことなる。

その意味では、一九七五年の川副武胤「古事記異界神女考」<sup>十四</sup>なども柳田の例とちかしいと判断できる。

当該論文は、『古事記』における結婚をあつかつたもので、具体的には、アマツカミとクニツカミとの婚姻などについて、異界ということばがつかわれている。この異界は、別の世界・空間をさしているとみてよいだろう。柳田は天への帰還を「異界交通」と称していたが、これとそれほどかけはなれた用法ではない。

そして題名のみならず、作中でもしばしば「異界」「異界性」「異界の神女」などと異界が顔をだす。これは、柳田の数ある論考のなかで、異界がおそらくはただ一例しかもちいられなかったことと比較すれば、かなり様相をことにする。

しかし、当該論文の三年後、一九七八年に刊行した『古事記の世界』<sup>十五</sup>において、川副氏はこの術語をもちいていない。つまりは継続的ではないということ、この点に柳田の孤例とのちかしさがあるとおもう。

端的な例としては、コノハナサクヤヒメやトヨタマヒメが、『古事記』の舞台から姿をけすことについて、「古事記異界神女考」では、「異界の神女として消去の必要がある」とあるのに対して、一方の『古事記の世界』では、「これが両女神を消去した理由」「火によって消去するしかなく」などとのみあって、「異界」ということばが使用されていない。

とくに後者が広範な読者を想定する新書版であることを念頭に

おけば、「異界」ということばは、特殊な用語とかがえられていた可能性がたかい。定着以前の、孤立的な使用例とみてよいだろう。

さて、しばしば柳田と対比される折口信夫については、旧版・新版の全集の索引<sup>十六</sup>によるかぎり、異界ということばを使用した形跡がない。もちろん索引による検索なので、一例もないかどうかについては問題があるが、やはり編者たちは折口の術語として異界ということばを想定していなかったことはみとめてよく、それは折口の術語ではなかったことをしめすだろう。

すくなくとも、この民俗学の二大泰斗の術語として異界ということばをみとめることは無理で、前掲した『日本民俗大辞典』が、「民俗語彙ではな」いとしているのは妥当である。

### 三

しかし、ことばの使用例がすくないことは、それをしめす概念のすくないことは直結しない。異界によって代替される以前にも、近似の概念をしめすことばはあった。異界以前に、異界的な場所をしめすことばの代表例として、「他界」と「異郷」とをとりあげる。

とくに前者の他界については、現在異界研究を牽引している小松和彦が、異界にさきだつことばとして使用していた<sup>十七</sup>経緯もあり、語誌をかんがえるうえで重要であるとかんがえる。異界の前史として、このふたつの術語についても確認をしておきたい。

これらのことばの来歴については、高橋六二にくわしいまどめがある<sup>十八</sup>ので、氏の概括をふまえて論述をすすめる。

「他界」という漢語については、はやく『日本書紀』に例<sup>十九</sup>があるが、ここでの意味は現在の外国にちかく、物理的にとおい場所の意で、異界とかさなるような意味はない。

現在「他界」といえば「あの世」の意が一般的だともうが、『俚諺集覽』<sup>二十</sup>が用例として『海道記』『吾妻鏡』をあげるように、その意味になるのは中世にはいつてからである。

この用法は、近代にはいつての『言海』（明治二十四〔一八九二〕年）<sup>二十一</sup>も「人間界ヲ去リテ、他ノ界ニ行ク意。佛氏ノ語。死スル事」と説明するように、仏教用語である。

また辞書レベルでは、十五世紀なかごろ成立の『下学集』<sup>二十二</sup>に「死去」、文明六（一四七四）年成立の『文明本節用集』や<sup>二十三</sup>、室町後期成立と目される<sup>二十四</sup>『伊京集』<sup>二十五</sup>にも「死去義也」と説明があるので、このころには「あの世」の意に定着していたとみてよい。

つまり近代まで「あの世」の意で他界は通用していたわけだが、ここに異界的な意義をもちこんで、それを通用させたのは、折口信夫であろう<sup>二十六</sup>。

高橋氏に指摘のある点をくりかえすことになるが、折口は「古代生活の研究―常世の國」（大正十四〔一九二五〕年）<sup>二十七</sup>において、つぎのようにのべる。

……此等から見ると、海外に常世の國を求める考へ方は古代の思想から当然来る自然なものである。出石びとの祖先の一

人たるたちまもりが「時じくの香の木実」を採りに行つたと伝へる常世の国は、大体南方支那に故土を持つた人々の記憶の復活したものと見る事が出来る。此史実と思はれてゐる事柄にも、若干民譚の匂ひがある。垂仁天皇の命で出向いた処、還つて見れば、待ち欲ばれるはずの天子崩御の後であつたと云ふ。理に於て不都合な点は見えぬが、常世の国なる他界と、我々の住む国との間に、時間の基準が違つてゐると言ふ民譚の、世界的類型を含んでゐる事を示してゐる。浦島子の行つたのも、やはり常世の国であつた。

当該論文において、折口はタジマモリがおもむいた「常世の国」を「他界」として認定する。そして、「我々の住む国との間に、時間の基準が違つてゐる」という共通性を根拠として、「浦島子」のおもむいた龍宮も同様の性質をもつ「常世」であるとみる。

折口の判断基準には、空間的な差異以上に（あるいはそれと同様に）、時間的な差異があるように、『日本民俗大辞典』の「他界」の説明に合致している。

いくばくかの例外はあるが、おおもむね死後の世界、つまりは「あの世」の意として中世以来使用されてきた他界の語義を、折口はゆききの可能な世界というところまでおしひろげたのである。

他界は折口の常套句で、「他界観念」などのいいまわしをふくめて、索引によるかぎり四十以上の使用例がある<sup>二十八</sup>。

この術語はたとえば西郷信綱が『古代人と夢』<sup>二十九</sup>において、「もとより根の国は古代人の想像上の他界」（「黄泉の国と根の国」）、あるいは「夢合わせは、神の啓示、他界からの信号」（「夢合わせ」）

ともなべて、「あの世」とは乖離した意で使用している。

あるいは倉塚暉子が、『巫女の文化』<sup>三十</sup>で、「琉球文化圏に普遍的な他界観は、長い信仰史をもつニライカナイである。海の彼方にあり祖霊がそこから訪れ豊饒や幸をもたらす明るい理想郷だとみなされている」（「琉球の天人女房」）と、理想郷へのあこがれを「他界観」とし、あるいは「地下の他界根の国」（「斎宮論」）ともいうように、折口の用語をひきつぐひとはすくなくない。

もう一方の異郷については、高橋氏はその発生を「近代の学問まで待たされたようである」とする。たしかに中近世において、他界のように「あの世」などの意で使用された痕跡はない。

しかし、ことば自体は『書言字考節用集』（享保二（一七二七）年版）<sup>三十一</sup>に、「異郷 又云他郷」との用例をみる。近世までは確実にさかのぼれるということ、ことば自体が「近代の学問」まであらわれてこないわけではない。

また『日本国語大辞典第二版』がひく、徳富蘆花の「思出の記」（明治三十四（一九〇一）年）に「知己後輩の望を負うて居ながら異郷の鬼となられたか」<sup>三十二</sup>とあるのは、折口よりはよい。

また島崎藤村にも、「椰子の實」（明治三十三（一九〇〇）年）に、「海の日の沈むを見れば 激り落つ異郷の涙」<sup>三十三</sup>という例もあり、かならずしも、近代以降の学術用語ではない。

意味としては、とくに藤村の例が「故郷の岸を離れて汝はそも波に幾月」ともあって、「故郷」と対比される文脈のなかでもちいられていることを考慮すれば、異界的な意味はなく、「よその土地」「故郷でない場所」くらいの意である。他界の原義にち

かい。

異界的な意味での使用はやはり折口がはやいようで、他界にさきんじて大正五（一九一六）年の「異郷意識の進展」<sup>三十四</sup>において「空想的存在としての他郷」と定義され、さらに大正九（一九二〇）年の「妣が国へ・常世へ—異郷意識の起伏—」では、「他国・他郷」対概念として「異国・異郷」を定義する。

われ・これ・こ、で類推を拡充してゆけるひとぐに即、他国・他郷の対照として何その国・知らぬ国或は、異国・異郷とも言ふべき土地を、昔の人々も考へて居た。われくが現に知つて居る姿の、日本中の何れの国も、万国地図に載つたどの島々も皆、異国・異郷ではないのである。唯《ただ》、まるくの夢語りの国土は、勿論の事であるが、現実の国であつても、空想の緯糸の織り交ぜてある場合には、異国・異郷の名で、喚んでさし支へがないのである。

これは、『書言字考節用集』が「異郷」と「他郷」とを「又云」によつてむすぶのと、相反する態度といつていいだろう。つまり、現実としての「べつのくに」「べつのさと」が「他」であり、空想としてのそれが「異」であるというのが折口の定義ということになるだろう。共同体の外側であるだけでは「他」であり、それが不可思議性をおびたときに「異」となる。ただし、ここに他界が介在してするのが問題なのである。

#### 四

ところでこの異郷と先述した他界とは、以降の研究では類似の概念としてとらえられることがおおい。前掲高橋氏は「他界・異郷」と、二種の用語をまとめて立項していたし、山田直巳も折口論をふまえて、異界・異郷・他界をおなじ文脈のなかで使用している。

異界の想定場所を考えると、……要するに、時間と空間が独特なネジレをもつて存在している世界を異郷と考えるべきだろう。……ところで、異郷、異郷意識、異郷憧憬、異郷論などに最も早く本格的にこだわつたのは折口信夫で……そこにおける心のあり方、意識のあり方（他界観）を究めようとした。<sup>五十三</sup>

これらの用語のうち、異郷は柳田・折口の両全集索引にも一定数みとめられる語彙で、術語としてみとめてよいとおもう。ただし、とくに他界についていえば、異界と他界とが等記号でむすばれるのでは、あくまで折口の論をうけてのものであることも注視する必要がある。

逆に、他界がながく「あの世」の意味で使用されてきた語彙であることをうけて、氣田雅子のつぎのような見解もある。

（他界を—稿者注）基本的には別の世界一般としての異界ではなくして、「死後の世界」を主題とするという取り決めがなされた。それは、異界と死後他界を区別できるかという議論を保留した上で、研究の出発点におけるさしあたっての対



象の規定であった。<sup>三十六</sup>

一九九四年の発言で、ここでは折口語彙としての他界と異界とを峻別し、他界を中世以来の意で使用することが主張されている。用語をこまかく切りわけける方が、語義のまぎれのすくなくなることは確実で、術語と概念との関係を明確にしようと考えらるなら、この見解は妥当である。

現在、異界ということばの定義にゆれがみられるのも、そもそもの淵源をかんがえれば、折口が常世や龍宮といった不可思議な世界に対して異郷という術語をもちい、それとほぼ同義として、しかも「あの世」の意で通用していた他界を使用したことにも、原因がないとはいえないだろう。折口は「あの世」の意ではない他界の例をしっかりと利用したのだから、それが当時の一般的な語義ではなかったことは、辞書等の記載から確実である。

折口の影響は、つぎの小松氏の発言などにもあらわれている。だから「他界」という言葉はいい言葉ですよ。他界というと死後の世界とか、幽霊が棲むとか、そういうイメージで受け取られがちなんだけど、他界というのは豊饒な世界で、われわれの生命力もそこから来られないんだ。富もそこからしか来られないという世界ですね。<sup>三十七</sup>

小松氏が術語を異界にうつすまえの発言であるが、ここで氏が「他界」という言葉はいい言葉」といい、また、死後の世界だけをさすのではなく「豊饒な世界」をさすものであるというのは、あきらかに折口の他界をふまえていよう。

逆にいえば、小松氏の発言を可能としたのは折口の認定がある

からで、そうでなければ、他界には原義としての「外国」(折口の術語としては、他郷・他国にちかい)の意と、中世以来の「あの世」の意しかなく、「豊饒な世界」はどこからもひきだせなかつたはずなのである。

もちろん、たとえば佐藤喜代治が、「漢語は簡潔で含蓄に富む」<sup>三十八</sup>というように、漢語の抽象性が、語義の多用さをうみだすことは事実であり、和語「あの世」とくらべたとき、漢語「他界」に「豊饒な世界」が見いだされること自体は、見当ちがいはいえない。

しかし中世以来、「あの世」の意として他界がほぼ固定的にもちいられてきたことを考慮すれば、やはり漢語の構想力という側面は抑制してとらえておくべきで、折口の論述におうところが大きい。このあたりの概念規定の曖昧さが、異界の氾濫をまねく要因で

なかつたとはいえないだろう。<sup>三十九</sup>

## 五

さて、ここまで異界ということばが、術語としては比較的新出であること、『大辞林 第二版』の記載とはうらはらに、民俗学の語彙とはかならずしも認定できないこと、異界以前の用語として、とくに折口による他界、異郷のあることをのべてきた。

そこで、異界という術語が一般化する過程を、つぎの二種の資料からおつてみたい。

ひとつは鳥居明雄の論考である。鳥居氏は、一九八一年に「他界意識と異界意識」<sup>四十一</sup>という随筆があり、さかのぼって七十年代後半から異界を使用しているので、比較的好い。

この鳥居氏の文章でも、初出時（一九七八）には異界とはなかった個所<sup>四十二</sup>に、「現世と異界の境界が確定され」（一九八九）<sup>四十二</sup>との例があるので、異界の使用頻度がたかまっていくな過程が、八十年代あたりとかがえられてくる。

もうひとつは、藤井貞和の『源氏物語の始原と現在』におさめられた、「異郷論の試み—物語史を求めて・一側面」である。

この論文は、題からも想像され、また「異郷と人類との交流は、大別して、異郷へ人類がさまよい込む場合と、異郷から異人がこちらがわへ訪ねてくるばあいと、ふた通りある」とあるように、折口の異郷論をふまえて、『萬葉集』の竹取の翁に関する歌群<sup>四十三</sup>から、『竹取物語』『源氏物語』における、不可思議な世界を論じたものである。全篇に異郷ということが使われている。

あるいは、やはり同書におさめられた「わが詩史・物語史」でも、「異郷とは何か。隠れ里、動物の浄土、人穴は異郷だ。常世の国も、死後の世界ではなく、生者にとって空間的に同時に存在することができた」とあり、藤井氏のテーマ（と術語）の、すくなくともそのひとつが、異郷であることは疑念がない。

しかし、二〇一〇年二月に出版された、当論文をふくむ岩波現代文庫版<sup>四十四</sup>の背表紙解説では、堂々と、「夜のしじまに語られた源氏物語生成に関わる深い闇、異界との緊張」とある。

おそらく、この解説文を書いたひとにとっては、異界と異郷と

は等価値となつている。これは現在（二〇一〇年二月）異界ということが通用している結果でもあるのだらう。

おなじ岩波現代文庫を材料にして比較してみると、小峯和明『説話の森』<sup>四十五</sup>は適例だとおもう。

相次ぐ戦乱に、生死の苦悩にさらされた中世のひとびとは、救いの道や処世の知恵を説話に求めた。それは天狗や龍の住む異界との接点でもあった。

見返しの解説であるが、こちらは解説と本文が対応している。

列挙すれば、「日常を超えた異界との交流の象徴として、大豆は機能しているのではないか」（「天竺」から来た天狗）、「境界はまさに異界とこの世を結ぶ堺であり」（「怨霊から愛の亡者へ」）、「説話はまったく未知の世界を可視する、ほとんど唯一にちかい回路である。異界との回路。それが説話だ」「今は昔」は、異界に人を導く記号にはかならない」（「雑談の時代—説話の表現史」）などとあつて、ところどころに異界が登場し、さらには「誰もが関心をもつ死後の世界、地獄や極楽、他界や異郷との交通を可能にするのも説話の世界だろう」と、異界のうちわけまでもが説明されている。

小峯氏は異界を「未知の世界」といい、具体例として「死後の世界、地獄や極楽、他界や異郷」という。この世ならざる世界を包括する用語として、異界をえらんでいるとおぼしい。折口による他界や異郷よりも、死後の世界等をふくむ分、上位概念として認定しているものとみてあやまらないだらう。

## 六

また、おなじく文庫本（講談社学術文庫）における本文と解説の関係ということで、青木正次の『雨月物語 全訳注』（上・下）<sup>四十六</sup>にもふれておく。上巻カバー裏解説に、「異界」がみえる。

安永天明期の暗い世相、他人や自分までも怪しく得体の知れぬ異界の妖怪のように見えてくる時代社会の中で、そういう仮象の向う側に人はどこまでその人間的な実体に迫りうるものなのか、を問いつめた怪異小説。

一方、下巻本文の解説にも異界の語は使用されている。こちらは、『雨月物語』各話の主人公についての説明である。

此岸の現実的な主人公に選ばれているのは、左内（貧福論）を除いて、すべて近世社会の観念的（都市的風俗的）な生活に浸っている、いわば近世的な自然人である。

各話の主人公像をこのようにおこしてきて、さらにつきのような解説がつづく。

彼ら此岸の主人公はみな、生活から観念界にずれこんで生きていながら、そのことに自覚がない、観念的な漂流者である。

……彼ら主人公たちも相手の人間との不可思議な体験を現実的にするのであって、語り手がそう見るような怪異の世界に迷いこんだりするのではない。彼らが現実生きて体験したさまを、語り手は怪異譚という形で、向こう側の異界に出会ったもののように、考え、表現するのである。

ここでは、「怪異の世界」と「向こう側の異界」ということは

をほぼ同義に使用していることがわかる。引用箇所とはべつに、青木氏のことばをかりれば「妖怪や死霊の類」のいる場所が、「向こう側の異界」ということになるのだろうか。

これは一九八一年の刊行であるので、後述するように、異界が一般的な術語として形成されるよりもいくらかはやい用例である。そして、「向こう側」という修飾語の存在は、当然、そうではない異界があることを予見させる<sup>四十七</sup>。

青木氏にとつて、「此岸」の異界というものが、どのようなものであるのか、当該書に明記はないのでその点は不明である。

しかし、近世において「此岸」の異界といえは、すぐに想起するのが、芝居町、遊郭といった、非日常の空間である。

近世のものとして、佐伯順子の言をひこう。

江戸時代の日本における周縁地域、異界といえは、悪所と言われた芝居町と遊里である。……ことに遊里は、「廓」、すなわち囲い込まれた場として、一般市民の日常生活の場とは異質な、境界に囲まれた空間であった。……言葉づかいひとつとっても、遊里は日常世界を離れた気分を味わわせるよう演出されていた。（流行の発信地という意味で―稿者注）遊里が都市の周辺地域にありながらも常に江戸文化の中心的話題で理由は、そこがエキゾチックな隔離空間としての魅力を放っていたからにはかならない。<sup>四十八</sup>

また内藤正敏も、「吉原遊廓」「小塚原刑場」「鈴力森刑場」「浅草見世物小屋」「戸隠山」「盛り場」等々をとりあげて、これらをひっくるめて都市のなかの異界であるといっている<sup>四十九</sup>。

つまり、現在ではこれらの非日常空間を異界と称することがあるわけだが、これはそれほどふりこくことではない。

前掲の『雨月物語 全訳注』が一九八一年の刊であるので、それにちかしい年代にだされた書籍に目をむけると、たとえば前田愛『都市空間の中の文学』（一九八二）がある。

悪場所としてノーマルな都市空間から慎重に隔離されている吉原も、この西の市の日にかぎってすべての門を開放する。

（「子どもたちの時間「たけくらべ」」<sup>五十一</sup>）

当該書では、吉原に対して「悪場所」という術語が使用され、「都市空間」と対峙している。

もつともこれは前田氏の術語というわけではなくて、氏が「日常的生活空間から慎重に隔離されていた廓や寺院、あるいは芝居町、被差別部落、牢獄」と特定するような非日常空間を「悪場所」と規定したのは廣末保で、氏の論考に「悪場所といえは、芝居と廓ということになる」とある<sup>五十二</sup>。

この「悪場所」という術語は、近世文献で上記のような場所をしめす「悪所」「悪所場」<sup>五十三</sup>を援用したことはだろう。前掲佐伯氏も悪所と異界をむすんでいたし、廣末氏も「歌舞伎の世界は悪所たりえた」と使用している<sup>五十四</sup>。史料から還元できる術語を、いくらか改変してもちいたものとみていいだろう。

なお、この通常の社会からずれた空間、地域ということでは、たとえば網野善彦が『無縁・公界・楽』で中世のそれを論じているが、当該書でも、中世史料にみえる用語である「無縁」「無縁所」などととともに、「聖なる場」（「関渡津泊、橋と勧進上人」）、「聖域」

（「アジール」としての家）、「特異な場」（「都市のできる場」）、「神々の世界」「冥界」（「市の立つ場」）などあって、基本的には異界ということばは利用していないことも確認しておく<sup>五十五</sup>。

さて、佐伯氏、内藤氏のように、比較的近時の論考がこれらのものを異界というのであれば、異郷、他界などとならんで、悪場所（悪所）も異界以前の術語としてみとめられるだろう。

なお前田氏前掲書は、題名のとおり文学における都市を問題としているので、この悪場所につらなるようなことばの使用はすくなくない。

いくつか任意にひく。

それではやすらぎを与えてくれる（内部空間）に対して、詩人は（外部空間）をどのように把えているのだろうか。（空間のテキストテキストの空間）

住まいの空間のなかで分離されるオモテ／ウラという二つの領域は、都市空間のレベルでは日常的な世界と非日常的な世界の対立に変換される。（同）

そこに読みとられるのは生垣ごしの隣人同士が言葉を交わしあうコミュニケーションの後退、つまりは他人的世界のはじまりである。（「山の手の奥「門」」）

以上のとおり、傍線個所のような数種の用語をひろい出すことができる。現在ならば、すべて異界とおきかえることも無理ではなさそうな例だが、異界ということばは使用していない。

この『都市空間の中の文学』は一九七五年から一九八二年までの論考を編集したものであるので、小松和彦などが異界を術語し

て使用しはじめるとはすこしきざつものである。

しかし、いくらかは使用されはじめている時期でもあるので、意図的に使用していない可能性もあるが、一応、まだ定着以前であつたためとかがえておきたい。

## 七

この術語としての未定着という問題は、たとえば『異界 中世ヨーロッパの夢と幻想』(一九八三年訳)<sup>五十六</sup>の冒頭、「訳者のこ」とばに端的にみとめられる。やや長文となるが引用する。

本書が表題として掲げた「異界」なる訳語について、私見を述べると、原語のジ・アザー・ワールドなる英語は、「来世」のほかにも、「彼岸」、「冥界」、「黄泉の国」、「別世界」、「天国」、「極楽」、「浄土」など種々の訳語が考えられ、また原著の扱う内容が必ずしも死後の世界のみに限定されず、現実の世界で人々の夢見る理想の楽園を含むことは事実である。しかし、東洋のわれわれの感覚に最も親しみやすい言葉は、やはり「来世」であり、また多くの英和辞典に共通する一般的訳語も「来世」となっているので、死後において訪れる楽園という觀念がすべてに勝る内容をなす事実をも踏まえて、あえて本文では「異界」に統一することはせず、適宜「来世」「冥府」「別世界」「異界」等訳し分けた。

傍線部の「東洋のわれわれの感覚に最も親しみやすい言葉は、やはり「来世」という発言については、辞典における「ジ・アザー・

ワールド」の訳語を例証としているので、一定の根拠がある。

小松氏は異界を「幻想・ファンタジー系の文学研究で用いられていた」<sup>五十七</sup>もので、そちらの術語を借用したとのべているが、この時点では、当の「幻想・ファンタジー系の文学研究」の、すくなくともその一端においては、異界という術語には相当の違和感があつたということになる。

それは異界という訳語について、決して一般的なものではなく、統一してもちいえることもできないと規定していることによつて、確認することができよう。

むしろ民俗学の分野にこそ先駆的な例があり、たとえば千葉徳爾が一九七六年に「山中異界」という用語をもちいている<sup>五十八</sup>。この論文ではとくに語義の説明はなかつたが、翌七七年に刊行した『狩猟伝承研究後篇』において、「はじめて「山中異界」の語を用い」<sup>五十九</sup>たこと、またその意義をつぎのようにとく。

山中を俗界と別個の地と考える気持ちは、日本民族の中になり濃厚な觀念となつているが、これまでの民俗学ではこれを「山中他界」と呼んで、人が死ぬことを「他界した」といふように、祖先の靈魂の行く場所であり、死後の世界がそこにあると考えたのであるとする。

従前の「山中他界」という用語が、死後の世界としたしく癒着する語であつたとの指摘であり、この点をふまえて「山中異界觀念の方は、これにくらべるとより原初的な、人類固有の不安・恐怖の觀念に由来すると考えられる」<sup>六十</sup>と、山中他界と山中異界を別個の概念としてつかいわけらるべきことを提唱するのである。

また飯島吉晴には、一九七九年の時点で使用例がある。

厠や糞便の両義性から、さらに変身空間や異界（別世界）としての厠という観念が生み出される。

……便所は一つの別世界と見られていることである。

厠は異界との境（出入口）をなし、その境界性ゆえに、再生のための埋葬地や変身空間、さらには異界そのものと見なされているわけである。

便所が此世と他界の媒介をなす境界的な場所となっていることが重要である。

便所をきれいにすると、美しい子どもが生まれるという伝承も、他界から此世へ完全な形で転換する、……譬喩的に言い表わしたものであろう。

厠は特別な空間……便所が死の世界（異界）であることを示している。……つまり厠は、異界との境をなすとともに、一

つのうちなる異界（他界）でもあり……

このように、「異界」「別世界」「他界」「埋葬地」「変身空間」「特別な空間」「死の世界」を、同義、ないしは類義で使用している<sup>六十一</sup>。この時期には民俗学での使用はみとめていいだろう。

はなしを悪場所と異界の関係にもどせば、もちろん佐伯氏の論考の場合、異界がどの範囲をしめすのかは定義されており、とくに混乱はない。

しかし、異界ということばからおさえてみると、一方には折口の異郷、他界をひきつく場合があり、ここまでの挙例によればこちらが多数派ではあるが、もう一方では廣末氏の悪場所をひきつ

ぐ場合もあるということ、かなり包括的な、意味範囲を定義しにくい術語となってしまうことは事実である。

逆にいえば、龍宮や常世は決して悪場所（悪所）とはいえないはずであるのに、異界ということばを使用するとき、この両者が統合することを許容してしまう。

近年、異界ということばが術語として多用されるのも、このような語義の曖昧さ、換言すれば、多義的に使用可能という、便利さに由来する面もすくなくないだろう。

このことは、本来はほかのことばでなえていた概念が、異界ということばに集約されていくことをしめし、その過程がこのあたりの論考からうかがうことができる。

## 結

ここまでのべてきたように、異界ということばは、少数の例外、ないしは個人レベルで術語化して使用された例は、柳田以来いくらかあるものの、広汎に、かつ頻繁にもちいられるようになるのは、一九七〇年代後半を待たなければならない。

またこの異界ということばは、それ以前としての術語、折口のとく異郷や他界、あるいは廣末氏のとく悪場所などを抱合して使用されており、範囲の拡大がいちじるしい。異界がまさしく「現代の流行語」となっていく過程をみとめることができるだろう。

この語義の範囲の拡大と、用法の曖昧さは、以降の年代の用例によって、さらに明確にできるが、紙数の問題から、ここまで

は紹介し、論じることができなかった。これらの点についても準備はあるので、あらためて考証したい。

- 一 概念と術語の関係については、工藤力男「被枕詞」考(『萬葉集校注拾遺』笠間書院・二〇〇八、初出二〇〇二)の論が適切である。
- 二 書記の拡散による齟齬・混乱の問題については、高島俊男「符号は意味をハッキリと」(『キライなことは勢揃いお言葉ですが』⑤)文藝春秋・二〇〇四、初出一九九九)にくわしい。
- 三 十川信介「異界と他界」(『文学』第二巻第六号・二〇〇一)
- 四 上野誠「神」という自動説明ボタンを封印せよ―あまりにも、巨大な風流獅子の話―(『正しい民俗芸能研究』第〇号・一九九一)『日本語の用例採集法』(南雲堂・一九九〇)等の、見坊氏の著作を参照。
- 五 同書第一巻第一巻(一九七二)にはとられていない。
- 六 ただし、同書の「序」にもあるとおり、現代のことばなので、作例だけで用例はない。また同社の『新辞林』(一九九九)にもあるが、作例が『大辞林』とおなじなので、これをおそつたのだろう。
- 七 内田忠賢「異界」(『日本民俗大辞典』上・吉川弘文館・一九九九)
- 八 民俗学研究所『総合日本民俗語彙』第一巻(平凡社・一九九五)
- 九 佐々木宏幹ほか編『日本民俗宗教事典』(東京堂出版・一九九八)
- 十 大島建彦ほか『日本を知る事典』(社会思想社・一九七二)
- 十一 柳田國男『日本の傳説』(アルス・一九二九)。引用は、『定本柳田國男全集』第二十六巻(筑摩書房・一九七〇)によつた。
- 十二 同『定本柳田國男全集』別巻五(筑摩書房・一九八〇)による。
- 十三 川副武胤「古事記異界神女考」(『史學雜誌』第八十四巻第二号・一九七五)
- 十四 川副氏『歴史新書9 古事記の世界』(教育社・一九七八)
- 十五 折口博士記念古代研究所『折口信夫全集』別巻(中央公論社・一九七六、中公文庫版)、折口信夫全集刊行会『折口信夫全集』第三十七巻(中央公論新社・二〇〇二)による。
- 十六 たとえば『異人論 民俗社会の心性』(青土社・一九八五)
- 十七 高橋六二「他界・異郷」(『上代文学研究事典』おうふう・一九九六)
- 十八 欽明天皇五(五四三)年三月条、持統天皇四(六九〇)年十月二十二日条。
- 十九 『増補俚諺集覧』(名著刊行会・一九七八)による。
- 二十 大槻文彦『言海』(筑摩書房・二〇〇四、明治三十七(一九〇四)年版複製)
- 二十一 中田祝夫編『古本下學集七種研究並びに総合索引』(風間書房・一九七一)
- 二十二 中田氏編『文明本節用集研究並びに索引』(風間書房・一九七〇)
- 二十三 沖森卓也編『図説日本の辞書』(おうふう・二〇〇九)
- 二十四 中田氏編『古本節用集六種研究並びに総合索引』(風間書房・一九六八)
- 二十五 ただし、『太平記』巻第十二「神泉苑事」に「若此龍王他界ニ移ラバ池淺ク水少シテ國荒レ世乏ラン」(古典大系による)とあるように、近代以前の「他界」の用例が、すべて「あの世」の意味であるわけではない。しかし、辞書の記載などを考慮すれば、ほぼ「あの世」の意とかがえることは不当ではないだろう。
- 二十六 『折口信夫全集』二(中央公論新社・一九九五、初出一九二五)
- 二十七 折口前掲書(十五)による。
- 二十八 西郷信綱『古代人と夢』(平凡社・一九七二)
- 二十九 倉塚暉子『巫女の文化』(平凡社・一九七九)
- 三十 中田氏ほか編『書言字考節用集研究並びに索引(改訂新版)』(勉誠出版・二〇〇六)。ただし、『増補俚諺集覧』『言海』などにはとられていないので、定着の度合いはたかくないだろう。
- 三十一 近代デジタルライブラリーによつた。
- 三十二 『藤村詩集 改版』(岩波書店・一九九五)
- 三十三 『折口信夫全集』二十(中央公論新社・一九九六、初出一九一六)
- 三十四 山田直巳「異郷訪問」(『日本神話事典』大和書房・一九九七)
- 三十五 氣田雅子「他界を考える」(『共同研究 日本人の他界観』国際日本文化研究センター・一九九四)
- 三十六 小松和彦・立松和平『他界をワープする 民俗社会講義』(朝日出版・一九八四)
- 三十七 佐藤喜代治『角川小辞典28 日本の漢語』(角川書店・一九七九)。
- 三十八 なお当該書にも異界はない。

- 三十九 術語認定のありかたについては、工藤力男「位相」考（『日本語学の方法 工藤力男著述選』汲古書院・二〇〇五、初出一九九六）の判断が的確だろう。
- 四十 鳥居明雄「他界意識と異界意識——「水無瀬」考——」（『能楽タイムズ』第三四七号・一九八二）
- 四十一 鳥居氏「求塚」論（『日本文学 始原と現在』笠間書院・一九八二）、一三三ページ。
- 四十二 鳥居氏「妻争いと入水—求塚」（『鎮魂の中世 能・伝承文学の精神史』（ぺりかん社・一九八九）
- 四十三 卷十六・三七九—三八〇二番歌（国歌大観番号）。
- 四十四 藤井貞和「源氏物語の始原と現在 付バリエードの中の源氏物語」（岩波書店・二〇一〇、原版一九七二）
- 四十五 小峯和明「説話の森 中世の天狗からイソップまで」（岩波書店・二〇〇一、原版一九九一）
- 四十六 青木正次「雨月物語全訳注」（上・下）（講談社・一九八一）
- 四十七 あるいは、この「の」連体修飾で、「向こう側である異界」の意であるかもしれない。その場合は、この連想は誤解であることになる。ただし、直接的には以下の論旨に影響しない。
- 四十八 佐伯順子「江戸の都市における異界—周縁として遊里」（『建築雑誌』一五六八号・二〇〇七）
- 四十九 内藤正敏「江戸・都市の中の異界」（法政大学出版局・二〇〇九）
- 五十 前田愛「都市空間の文学」（筑摩書房・一九八二）
- 五十一 初出は一九七五年。いまは一九八〇年ころの用語をおさえる資料としての利用が目的であるので、『都市空間の文学』所収版によった。
- 五十二 廣末保「悪場所の発想—伝承の創造的回復」（三省堂・一九七〇）。
- 五十三 『日本国語大辞典 第二版』では、芝居町や廓の意での「悪所」は、俳諧「江戸十歌仙」（二六七六）を、「悪所場」は歌舞伎「初冠 曾我皇月富士根」（一八二五）をそれぞれ初例としている。
- 五十四 廣末氏「悪場所の秘儀—虚構の性」（『悪場所の発想—伝承の創造的回復』、初出一九六九）。また、「辺界の悪所」（『辺界の悪所』平凡社・一九七三、初出一九七三）にも「悪所」は複数みえる。
- 五十五 網野善彦（『増補』無縁・公界・楽）（平凡社・一九八七、原版一九七八）。「基本的」というのは、一九八七年に増補された

補注に異界とある。ただし、ここは後述する飯島吉晴「竈神と廁神 異界と此の世の境」（人文書院・一九八六）についてふれた個所であり、同書がおおく異界を使用しているのでつかわれたものだろう。

五十六 ハワード・ロリン・パッチ著、黒瀬保ほか訳「異界 中世ヨーロッパの夢と幻想」（三省堂・一九八三）。なお同書の索引によれば、「異界」とは山、島、不思議な国などで、劇場などはふくまれないから、悪所的な意味はなく、折口の他界にちかしい。

五十七 小松和彦編「日本人の異界観」（せりか書房・二〇〇六）

五十八 千葉徳爾「山村の生態」（『日本民俗学講座 第一巻 経済伝承』（朝倉書店・一九七六）

五十九 千葉氏「山中異郷論」（『狩猟伝承研究後篇』風間書房・一九七七）

六十 千葉氏前掲論文（五十八）による。

六十一 飯島吉晴「廁考—象徴的空間としての廁」（『現代宗教』第四号・一九七九、のち前掲五十五、同氏「竈神と廁神」に収録）

## 追記

本論文は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C・一般）「超越する「異界」—異文化・国語教育・エコロジー教育の架け橋として—」（研究課題番号・二一五二〇三八三）の第四回研究会（二〇一〇年六月六日、於東洋大学）での口頭発表「『異界』の意味領域—「術語」のゆれをめぐる—」をふまえて、その一部を抽出し、修正をほどこしたものです。

また、当該発表に際しまして、研究員のみなさまには、貴重な御指摘・御批正をいただきました。力不足によりまして、かならずしも反映することはできませんでしたが、この場をお借りいたしまして、篤く御礼申し上げます。

\* 人間科学総合研究所院生研究員・東洋大学大学院文学研究科国文学専攻



## A meaning domain of "Ikai("The other world" or "another world")" : I consider the definition of words

Akiyoshi IKEHARA \*

---

In this article words called "Ikai" (異界) of the investigation intended for it. I considered the etymology of words called "Ikai" from 1970's to 1980's to be concrete.

The words called "Ikai" are used a lot now, but it is hardly registered with a small Japanese dictionary. Not words having an old origin, it is the words that it is late years, and has begun to be used. As words of the before similar meaning that words called 異界 were used for, "Takai" (他界) and "Ikyo" (異郷) were used. Or, as words to hint at the amusement centers, "Akusho" (悪所) or "Akushoba" (悪所場) were used.

I investigated it from the former words that "Ikai" like this was used for and was connected to the "Ikai" how and considered how I changed. As a result, the many meanings of a word repeated, and words called "Ikai" were able to confirm that a concept rule was vague.

**Key words:** "Ikai" (異界), Etymology, A definition, A meaning domain, A concept rule

---

---

\* A graduate student in the Graduate School of Japanese Literature, and a graduate member of the Institute of Human Sciences at Toyo University

